

平成 26 年 5 月 19 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520741

研究課題名(和文) 第二次世界大戦後ウィーンにおけるユダヤ人の生活再建をめぐる諸問題の解明

研究課題名(英文) The Rehabilitation of Vienna Jewish Society after the Second World War

研究代表者

野村 真理 (NOMURA, MARI)

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：20164741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、三つの研究課題(研究目的欄参照)を掲げてスタートしたが、最も顕著な研究成果をあげることができたのは、戦後ウィーンのユダヤ人社会とも密接に交錯するポーランドのユダヤ人DP問題であり、単著『ホロコースト後のユダヤ人 約束の土地は何処か』(世界思想社、2012年)を刊行することができた。本書は、戦後ポーランドでのユダヤ人DPの発生状況、ユダヤ人DPの西への移動とドイツおよびオーストリアのキャンプでの彼らの状況、ユダヤ人DP問題に対するアメリカ、国連等、国際社会の対応、パレスティナ/イスラエル移住後のユダヤ人DPの状況を総合的に明らかにした日本で最初の研究書である。

研究成果の概要(英文)： The most remarkable result of this five-year research was the publication of the book entitled *After the Holocaust: Where is the Promised Land for the Jewish Displaced Persons?* (Sekai shissha, Kyoto, Japan 2012). In this book I examined the situation of the Holocaust survivors under the anti-Semitic persecution in postwar Poland; their escape to German and Austria which had a influence also to the rehabilitation of the Jewish life in postwar Vienna; the stance of international community on the problems of Jewish Displaced Persons and the hardship of DP who emigrated to Palestine/Israel.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ユダヤ人

1. 研究開始当初の背景

一般にヨーロッパのユダヤ人問題研究は、ホロコーストを最終章とし、その後の研究者の関心は、イスラエル建国史あるいは中東をめぐる国際関係の研究へと移行する。実際には、ホロコースト後のヨーロッパのユダヤ人は、意識の上でも実態の上でも、シオニズム運動（イスラエル建国運動）に取り込まれたわけではなかったが、戦後ヨーロッパのディアスポラ・ユダヤ人の生活再建の歴史はほとんど研究の対象とならず、国内でいえば、ドイツを対象とした武井彩佳氏による『戦後ドイツのユダヤ人』（白水社、2005年）があるのみで、オーストリア（ウィーン）については皆無に近かった。

また、ホロコーストからイスラエル建国史への移行にしても、そこで鍵となるユダヤ人DP（Displaced Persons）問題について、日本には先行研究が存在しない状況であった。本研究が対象とする戦後ウィーンは、このユダヤ人DPのパレスティナ/イスラエルへの渡航において重要な通過点となり、ウィーンでの生活再建をめざすユダヤ人と、ヨーロッパでの生活再建を放棄してパレスティナ/イスラエルへと向かうユダヤ人とが交錯して、戦後のユダヤ人が直面した諸問題が端的に現れた街であった。

2. 研究の目的

本研究は、5年の研究期間中に取り組むべき研究課題として、以下の3課題を掲げた。

(1)ウィーンにおけるホロコーストとユダヤ人ゲマインデ執行部のかかわりの検証

本研究は、戦後ウィーンのユダヤ人を対象とするが、それに先立ち、(1)の課題を明らかにしておくことが必要であった。というのも、ナチはウィーンのユダヤ人ゲマインデを利用し、絶滅収容所へのユダヤ人の移送等においてゲマインデの指導者にホロコーストの協力者となることを強要した。このユダヤ人自身によるホロコースト加担は、戦後のユダ

ヤ人社会に大きな精神的傷跡を残し、戦後再建されたゲマインデは、まずユダヤ人自身の脱ナチ化に取り組むことを余儀なくされたからである。

(2)ポーランド・ユダヤ人DP問題

ナチの反ユダヤ主義は、もともと東欧諸国に存在した反ユダヤ主義を著しく過激化させ、戦後まもなくポーランドに帰郷したユダヤ人ホロコースト生存者が、今度はポーランド人の手によって虐殺され、これを当時の社会主義政権が黙認するという事態が発生する。この虐殺で恐怖にかられ、ポーランドを脱出したユダヤ人DPが流れ込んだのがオーストリアのウィーンであった。

ユダヤ人DPの多くは、その後パレスティナ/イスラエルにわたったが、一部はウィーンに残った。そのため戦後ウィーンのユダヤ人社会の再建を論じるには、ユダヤ人DP問題の詳細を把握し、ウィーンに残留したDPがどのようにウィーン・ユダヤ人社会へと統合されたかを検証する必要があった。

(3)戦後ウィーンの反ユダヤ主義とユダヤ人の生活再建及びユダヤ人犠牲者補償問題

オーストリア政府に対するユダヤ人犠牲者の補償要求は、ウィーンの一般市民の理解を得られず、市民のあいだに、「自分たちこそ声高に金を要求するユダヤ人犠牲者の犠牲者」という転倒した意識さえ発生させた。それゆえ第3の研究課題は、戦後オーストリア市民のユダヤ人に対する意識のあり方と、他方で、みずからの正義を主張しつつも、無用な挑発を避けながらユダヤ人犠牲者に対する補償要求の指揮をとったユダヤ人ゲマインデ執行部の対応、反ユダヤ主義に対するユダヤ人市民の意識のあり方を明らかにすることにおかれた。

3. 研究の方法

オーソドックスな歴史研究の手法に従い、先行研究の調査、収集と批判的検討および

研究史上での本研究の位置づけの確認
研究目的欄に掲げた研究課題(1)～(3)を明らかにするための歴史史料の発見・ 解説・ 分析 の2本柱によって進められた。

4. 研究成果

研究目的欄に掲げた三つの研究課題のうち、最も顕著な研究成果をあげることができたのは、(2)のポーランド・ユダヤ人DP問題である。これについては、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」主催のシンポジウム「シオニズムの解剖 現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克」(2010年10月9/10日、会場：東京麻布台セミナーハウス)にて、「ホロコースト後のユダヤ人DP問題」というタイトルで報告を行い、論文化した報告は共著『シオニズムの解剖 現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』(人文書院、2011年11月、121-142ページ)に収録された。

さらに金沢大学人文社会科学系学術図書出版助成(平成24年度刊行分)を得て、単著『ホロコースト後のユダヤ人 約束の土地は何処か』(世界思想社、2012年11月、xii, 181ページ)を刊行することができた。本書は、戦後ポーランドでのユダヤ人DPの発生状況、ユダヤ人DPの西への移動とドイツおよびオーストリアのキャンプでの彼らの状況、ユダヤ人DP問題に対するアメリカ、国連等、国際社会の対応、パレスティナ/イスラエル移住後のユダヤ人DPの状況等を総合的に明らかにした日本で最初の研究書である。『読売新聞』(2013年1月20日)および日本ユダヤ学会誌『ユダヤ・イスラエル研究』(第27号、2013年)に書評が掲載された。

また、研究課題(2)に密接に関連する研究成果として、単著『隣人が敵国人になる日

第一次世界大戦と東中欧の諸民族』(人文書院、2013年9月、150ページ)を刊行した。

第一次世界大戦によるオーストリア＝ハンガリー二重君主国とロシア帝国の崩壊、ポーランドおよびオーストリア＝ハンガリー後継諸国家の独立は、この地域でのナショナリズムと歴史的に存在した反ユダヤ主義を活性化させたが、この反ユダヤ主義は、解決されることなく、第二次世界大戦後のユダヤ人DP問題にもつながっていった。

(1)および(3)の研究課題については、(2)の研究課題で2冊の著書を刊行し、これに予想以上の時間と精力を要したため、研究成果をまとめるのが遅くなった。必要な史料・資料は、2011年のサバティカル期間中、ウィーンのユダヤ人ゲマインデのアルヒーフ等で調査・収集して、読解の作業もほぼ終わっている。

(1)の研究課題については、2014年2月末に「ナチ支配下ウィーンのユダヤ人移住におけるウィーンモデルとゲマインデ」を脱稿し、現在、日本ユダヤ学会誌『ユダヤ・イスラエル研究』(第28号、2014年)に投稿中である。

(3)については、具体的研究成果としては、本研究期間中は、第108回史学会大会公開シンポジウム「越境する歴史学と歴史認識」(2010年11月6日、会場：東京大学)にて、報告「二つの顔を持つ国 第二次世界大戦後オーストリアの歴史認識問題」を行うにとどまった。すでに史料・資料は読み終えており、今年中に論文にまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

1. 野村真理「近親憎悪? ウィーンのイディッシュ」『立命館 言語文化研究』第25巻第4号、2014年3月、25-33、依頼原稿。

2. NOMURA, Mari, Rattenfänger von Hameln oder : Die verschwundene Welt der Deutschbalten, in: *From Krakow to Vilnius*,

Tokyo University of Foreign Studies, 2. 2013, p. 7-16. 依頼原稿

3.野村真理、書評「長田浩彰著『われらユダヤ系ドイツ人 マイノリティから見たドイツ現代史 1893-1951』(広島大学出版会、2011年)」『ユダヤ・イスラエル研究』第25号、2011年12月、60-64、査読有。

4.野村真理「ガリツィアを語ることの困難について」篠原琢編『ヨーロッパ東部境界地域の共有遺産研究1 ガリツィア』東京外国語大学、2011年3月、123-142、依頼原稿。

5.野村真理、書評「武井彩佳著『ユダヤ人財産はだれのものか ホロコーストからパレスティナ問題へ』(白水社、2008年)」日本ドイツ学会『ドイツ研究』第44号、2010年3月、217-220、査読有。

6.野村真理「1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人 ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって」(後編)『金沢大学経済論集』第30巻第2号、2010年2月、175-200、査読無。

7.野村真理「1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人 ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって」(前編)『金沢大学経済論集』第30巻第1号、2009年12月、219-246、査読無。

8.野村真理、書評「スティーヴン・ベラー著、桑名映子訳『世紀末ウィーンのユダヤ人 1867-1938』刀水書房、2007年」『西洋史学』第233号、2009年6月、79-81、査読有。

〔学会発表〕(計 3 件)

1.野村真理「未完の戦争：東部戦線によせて」2013年5月12日、第63回日本西洋史学会大会小シンポジウム「第一次世界大戦再考」、会場：京都大学

2.野村真理「二つの顔を持つ国 第二次世界大戦後オーストリアの歴史認識問題」2010年11月6日、第108回史学会大会公開

シンポジウム「越境する歴史学と歴史認識」、会場：東京大学(本郷)

3.野村真理「ホロコースト後のユダヤ人DP問題」

2010年10月9/10日、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」主催シンポジウム「シオニズムの解剖 現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克」、会場：東京麻布台セミナーハウス

〔図書〕(計 3 件)

1.野村真理『隣人が敵国人になる日 第一次世界大戦と東中欧の諸民族』人文書院、2013年9月、150。

2.野村真理『ホロコースト後のユダヤ人 約束の土地は何処か』世界思想社、2012年11月、xii, 181。

3.白杵陽監修、野村真理他14名『シオニズムの解剖 現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』人文書院、2011年11月、121-142。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野村 真理 (NOMURA MARI)
金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：20164741

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：